

# 『古今和歌集』における歌語「涙川」について

谷 崎 た ま き

## 一 はじめに

『万葉集』にはみられず、『古今和歌集』の恋歌の巻でしばしば詠まれている歌語に、「涙川」がある。

「涙川」とはどのような歌語なのだろうか。角川古語大辞典によると次の通りである。

流れる涙を川として風景に見立て、あるいは激しく流れる涙のたとえとして用いられている。

また、小町谷照彦氏は、「涙川」ということばについて、『古今和歌集』に至って表現的に深化した歌語の典型として挙げ、「悲哀の涙をめぐるさまざまな心情や行為が映像化されて」いるのだと説明している。<sup>(2)</sup> また、神谷かをる氏はこの歌語の成り立ちについて、日本人が「乳・汗・血・涙」などの分泌物や排泄物を汚物視する傾向があったが、漢詩文に「なみだ（涕涙泣）」が頻繁に使われた影響で、日本でも和歌の素材として「涙」や「血」が用いられるようになったことを指摘し、この現象について

古今時代には涙そのものを美化していった（美化しなければ和歌に撰取しにくかったのかもしれない）

と述べている。<sup>(3)</sup> 漢詩の影響を受け、「涙」は分泌液（汚物）というイメージから一転して、悲哀を美しく表現する歌語として、勅撰和歌集に収

載される和歌に詠まれるようになった。そのうちの一例が歌語「涙川」であるといえよう。では、この歌語はどのようなものであるか、『古今和歌集』に収載される「涙川」を詠み込んだ和歌について考えたい。

## 二 八首の和歌

『古今和歌集』において、「涙川」が詠み込まれた和歌は次の八首である。

おき火 良香

466 流れ出づる方だに見えぬ涙川沖ひむ時やそこは知られむ（卷十物名）

……①

よみ人しらず

511 涙川なに水上をたづねけむもの思ふ時のわが身なりけり（卷十一恋歌）

……②

よみ人しらず

527 涙川枕流るるうき寝には夢もさだかに見えすぞありける（卷十一恋歌）

……③

よみ人しらず

528 篝火にあらぬわが身のなぞもかく涙の川に浮きて燃ゆらむ（卷十一恋歌）

歌一）……④

よみ人しらず

531 早き瀬にみるめ生ひせばわが袖の涙の川に植ゑましものを（巻十一恋歌一）……⑤

題知らず

貫之

573 世とともにながれてぞゆく涙川冬もこほらぬみなわなりけり（巻十二恋歌二）……⑥

業平朝臣の家にはべりける女のもとに、よみてつかはしける

朝臣

617 つれづれのながめにまさる涙川袖のみ濡れてあふよしもなし（巻十三恋歌三）……⑦

かの女に代りて返しによめる

平朝臣

618 浅みこそ袖はひつらめ涙川身さへ流ると聞かばたのまむ（巻十三恋歌三）……⑧

①の歌は、巻十「物名」において、「おき火」（赤くおこった炭火）を題に詠んだ歌で、歌の内容は題とは関係のないものだと思われる。この歌の通釈は以下のとおりである。

どこが源なのかさえ分からぬほど、とめどなく流れ出る涙川なのだ。川我真ん中まで干上がったときには悲しみの底の深さも分かるだろうか。

また、片桐洋一氏は「沖ひむ」について

「沖」について、「河にも沖」があるとか、それほど大きな河であることを示すために河に沖があるように言っているのだと説くのが通説のようであるが、河の沖を詠んだ例はなく、無理であろう。「流れ出づる」という言い方は、「河が海に流れ出る」と見てこそ納得される言い方である。

と解説しており、「沖」が涙川の沖を指すとする解釈を否定し、次のように解釈している。

河を流れ出て何処へ流れていくのかもわからない涙河は、沖が干上るときには水が流れ切って河底は知られようが、そういうことはあり得ないから、私の涙は流れ続けることであるよ。

干上がることを仮定した「沖」が川のものなのか、海のものなのか。いづれにしても、「沖」、「そこは知られむ」とあることから、涙河がとても深いものであることを詠んだ歌であることがわかる。ここでは、涙川の深さがどれほどかによって、その悲しみがどれほど深いものであるかを表現したのであろう。

『古今和歌集』の恋歌一から恋歌五の巻は、恋のはじまりから終わりまで、その推移を追うように和歌が配列されている。②から⑤の歌は、巻十一、恋一に収載されていることから、いずれも恋のはじまりを詠んだ歌であることがわかる。②の歌は、涙川の水源は他でもない、自分自身であったという歌であるが、この「自分自身」というのは、さらに言えば「恋をしている自分自身」だと考えられる。

③の歌は、「浮き」と「憂き」をかけ、泣きながら眠ったために涙川に枕が流れてしまい、川の上で寝るわが身は夢もはつきり見ることができないのだと嘆いた歌である。泣きながら眠るといっても、恋歌一に収載されていることから、恋愛のはじまりを詠んだものであること考えられるため、恋人の訪れがなくて泣きながら眠るという歌であることは考えにくい。むしろ、ひとつ前の歌、

526 恋死ねとするわざならしうばたまの夜はすがらに夢に見えつつ  
と関連していると考えると、はつきりと見ることができない夢というのは思い人の夢であり、涙は片思いの相手を恋しく思うあまり流した涙で

あると考えられる。

⑤の歌は、相手を見る機会、つまり、夫婦になることを意味する「見る目」と、海草の「海松布」をかけて、早瀬に海松布が生えるものならば、私の袖を流れる涙川の瀬に植えたいものだ、というもので、実際にはありえない機会であるということが前提となっている。また、ここでの涙川は、①の「沖」の表現とは逆に、川の浅いところを意味する「瀬」が詠まれており、涙が深く静かな沖に例えられた①比べ、ここでは涙を勢いを増して激流となった瀬に例えていることに注目したい。

また、卷十二恋歌二に収載される⑥の歌で詠まれる涙川は、涙が流れる様子を冬になっても凍らないほどに激しい流れを持つっており、激流の早瀬を持つ涙川を詠んだ⑤の歌と共通しているといえよう。

卷十三恋歌三に収載される⑦と⑧の二首は、一組の贈答歌となっており、この贈答歌は、『伊勢物語』の一〇七段にもみることができる。

むかし、あてなる男ありけり。その男のもとなりける人を、内記にありける藤原の敏行といふ人よばひけり。されど、若ければ、文もをさをさしからず、ことばも言ひ知らず、いはむや歌はよまざりければ、かのあるじなる人、案を書きて、書かせてやりけり。<sup>⑥</sup>

つまり、『伊勢物語』一〇七段では、藤原敏行が女を妻に求めたものの、女はまだ幼く、自分で歌を作ることができなかったため、業平が代わりに文案を作り、女に書かせて藤原敏行に返させた。これを読んだ藤原敏行が感動して贈ってよこした歌が⑦の歌である。⑦の歌では、涙川は増水して袖が濡れるばかりで渡るに渡れないという、二人の間に阻むものとして表されている。ここでは、①の歌のように、涙川の水かさが増していることと、自分の悲しみがより深くなったことを表している。

⑧の歌では、敏行の歌の「袖のみ濡れて」に対し、気持ちの浅いために

涙川が浅く、袖が濡れるだけであって、本当に思う気持ちが強いのならば涙川は大河となり、身体ごと流してしまうはずだと切り返しており、それほど深い涙川ではない、つまり、それほど深い悲しみでもないのだと訴えている。

### 涙川の特徴

八首の和歌から読み取れる、「涙川」の特徴についてまとめてみたい。

- ・恋の歌に詠まれることが多い
- ・恋歌四、恋歌五には使われていない
- ・川の深さで悲しみの深さを表す
- ・流れの速さで思いの強さを表す
- ・恋人同士を隔たる存在としても使われる
- ・涙と川は「流れ」るものである

『古今和歌集』において「涙川」という歌語が詠み込まれている歌が恋歌一から恋歌三の間で七首収載されているのに対し、恋歌一―五に次いで「涙」が多く詠まれていた卷十六の哀傷歌をはじめ、他の巻には「涙川」という歌語が読み込まれた歌は一首も収載されていない。少なくとも『古今和歌集』の中で「涙川」という歌語は、恋によって流す涙を表すものとしてのみ使用されていると考えられる。また、李元熙氏は、「恋歌」の巻における涙川の用例について、

恋歌の構成上からみて片思いの恋、まだ逢えない恋に「涙河」の歌が全部入っているのだ、その片思いの恋を相手に知らせるすべなく悩んでいる心情を歌うのにこの「川」がよく用いられたと思われる。<sup>⑦</sup>

と述べている。恋歌の一から三において頻繁に採用されていた「涙川」という歌語が、恋歌四、五では一度も詠み込まれていない。先述したとおり、恋歌の五巻は恋の予感・始まりから恋の終わりまでの推移を追うように配列・構成されているので、恋歌の四、五では、恋の終わりを詠んだ歌が収載されている。恋歌の五において、恋の終わりを嘆き、涙を流す歌は多く詠まれているが、「涙川」という歌語を詠み込んだ歌は一首も無いのである。

次に、①、⑦、⑧の歌では悲しみの深さや愛情の深さを涙川の深さに例えており、⑤、⑥の歌は涙川の深さではなく、流れの速さや勢いを、そのまま涙がとめどなく流れる様子になぞらえている。これらのことから、涙川の深さ、流れの速さが、詠み手の悲しみの大きさをあらわす尺度の役割を果たしていることがわかる。

また、⑦、⑧の歌では、「涙川」は思う人に逢うために越えねばならないものとして扱われている。自分の涙によってできた川が、まるで織姫と彦星の間を阻む天の川のように行く手を阻むのである。

また、②の歌では川の流れの源を探り、③の歌では枕が流され、⑧では思いが強いのなら身体が流されるはずであると詠んでいるなど、涙が「流れる」様子を、川の「流れ」になぞらえた歌が多く詠まれている。⑥の歌のように、「泣かれ」と「流れ」の意味がかかるという点からも、「流れ」と「涙川」が強く結びつくものであることがわかる。

これらの特徴から、「涙川」という歌語が当時の人々に様々なイメージをもって使われていたことがわかる。それぞれの歌をみると、涙川の大きさ、深さ、流れの速さ、情景などは実に様々である。涙川は、「悲哀」という軸を中心に、時には袖に流れる早瀬として、またある時には枕や身体を流してしまうほどの大河として、さまざまにイメージされて

歌に詠まれていた。特に指摘できるのは、「悲哀」が、人の死や親しい人との辛い別れ、恋の終わりに感じるものではなく、恋の予感から絶頂までの間において、相手を恋しく思ったり、気持ちを推し量ることができずにいることから生じる「悲哀」であるという点である。

#### おわりに

平安時代の文学作品を読んでいると、男女ともに泣く場面がよくみられる。それは『古今和歌集』においても同じことで、作品中には実に多くの「泣く」ことを描写した和歌が収められている。ここでは、「涙川」という歌語が詠み込まれた歌に焦点を絞って考察を進めてきたが、「涙川」という歌語が、漢詩の影響を受けて分泌液（汚物）というイメージから一転して、悲哀を美しく表現する歌語として「涙」が勅撰和歌集に収載される和歌に詠まれるようになったのだとすると、この歌語がどのように漢詩の影響を受けてきたのか、つまり、「涙川」や「血涙」が、従来のイメージや風潮に反して、好んで使われるようになるまでの過程や、『源氏物語』などといった後の中古文学作品に「涙川」という歌語がどう使われているかを今後の課題としたい。

※本文中の和歌の引用は、高田祐彦訳注『新版古今和歌集』（角川学芸出版二〇〇九年六月）による。

#### 注

- (1) 『角川古語大辞典』（角川書店一九八二年六月）
- (2) 小町谷照彦『古今和歌集と歌ことば表現』（岩波書店一九九四年一〇月）

- (3) 神谷かをる「涙」のイメージ・万葉集から古今集へ」(『仮名文学の文章史的研究』和泉書院一九九三年八月)
- (4) 小沢正夫・松田成穂『新編日本古典文学全集 古今和歌集』(小学館一九九四年十一月)
- (5) 片桐洋一『古今和歌集全評釈(中)』(講談社一九九八年二月)
- (6) 石田穰二訳注『新版伊勢物語』(角川書店一九七九年二月)
- (7) 李元熙「古今集恋の歌における「川」のイメージ」(『日本文芸論叢』5 東北大学文学部国文学研究室一九八七年)

#### 参考文献

- ・高田祐彦訳注『新版古今和歌集』(角川学芸出版二〇〇九年六月)
- ・ツベタナ・クリステワ『涙の詩学』(名古屋大学出版会二〇〇一年三月)
- ・『新編国歌大観』編集委員会監修『新編国歌大観』(CD-ROM版 Ver.2)(角川書店二〇〇三年)
- ・片桐洋一『歌枕歌ことば辞典 増訂版』(笠間書院一九九九年六月)
- ・久保田淳・馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』(角川書店一九九九年五月)